平成椿説文学論

富岡幸一郎

【目 次】

平成という廃墟から……　4

第一論　文学における「戦争」と「平和」　9
吉田満『戦艦大和ノ最期』、大岡昇平『野火』

第二論　戦前・戦中日本人の東亜への真摯な態度　27
中島敦『南島譚』

第三論　アジアと資本主義　37
新渡戸稲造の植民政策論、野間宏『さいころの空』

第四論　文学者による歴史的「戦争論」　55
林房雄『大東亜戦争肯定論』

第五論　時代の不安を物語る　65
夏目漱石『現代日本の開化』、芥川龍之介『或阿呆の一生』

第六論　言葉につながるふるさと　79
太宰治『津軽』、島崎藤村『夜明け前』

第七論　漂流する家族　95
小島信夫『抱擁家族』、富岡多恵子『波うつ土地』、舞城王太郎『みんな元気。』

第八論　歴史への返答としての文学　111
坂口安吾『戦争と一人の女』、古山高麗雄『セミの追憶』
第九論　沖縄というトポスの逆説　127
目取真俊『虹の鳥』、大城立裕『カクテル・パーティー』
第十論　日本文学に跋扈（ばっこ）するデマの怪物　143
江藤淳『批評と私』
第十一論　「国土」という意識の喪失　159
内村鑑三『デンマルク国の話』
第十二論　チベットと日本人　175
河口慧海『チベット旅行記』
第十三論　「先住民族」という幻想　191
武田泰淳『森と湖のまつり』
第十四論　国家論の不在と文学　205
中野重治『五勺の酒』
あとがき　222

平成という廃墟から……

平成という三十年あまりの時代を振り返ってみるとき、筆者のなかに広がるのは、「廃墟」のイメージである。それは戦争によって見渡すかぎり瓦礫の山となった焼跡の風景ではなく、高層ビルが林立し街は繁栄し喧噪をきわめるなかで、そこに居るはずの人間が消え去ってしまったかのような荒涼とした、空虚さにみちた光景である。「人間」といういい方はよくないだろう。日本人とはっきりいった方がいい。

平成三（一九九一）年の四月から翌年三月末まで、筆者はドイツのデュッセルドルフに滞在し、帰国するとバブル崩壊という聞き慣れない言葉が国中を踊っていた。平成元（一九八九）年十一月にベルリンの壁が市民の手によって崩され、翌九〇年には東西に分断していた「ドイツ国家」が統一する。奇蹟といわれた統一ドイツ実現の熱狂のさなかにかの地にいたわけだが、その年の十二月二十五日にはソ連最高会議共和国会議がソ連消滅宣言を採択し、文字通り東西の冷戦構造が崩れ去った。

世界は第二次大戦後の米ソ両大国の「戦後」体制の激変期をむかえていたのであった。

しかし、日本はその大きな歴史の波に乗ることもできず、政治は混迷し経済は次々と破綻をきたしていった。平成四年の非自民の細川護熙（もりひろ）政権、平成六年の自民党、社会党、さきがけ三党による村山富市（とみいち）社会党委員長による内閣など、政治上の混乱と椿事は、国家の漂流をもたらし、日本人が冷戦崩壊や経済の崩落に何ひとつ対処できなかったことの無惨なあかしとなった。

そして二十一世紀に入った平成十三（二〇〇一）年には、小泉純一郎内閣が誕生し、「構造改革」という名の「日本」破壊はさらに進み、米国の9・11テロ事件など世界の〈戦争〉状態のなかで、この国は政治も経済も失速し、景気の急落によって文化も永い停滞期に入る。その後の民主党政権の亡国内閣下での東日本大震災は、自然の災害と近代文明がつくり出した原子力という究極のエネルギーとが、巨大な災厄として結びついたという点で、まさに未曾有の出来事となった。それは現在も進行中の危機である。

平成から令和になっても、この三十年という時間のなかで露わとなった日本人の「廃墟」ともいうべき状況は、何ひとつ変わってはいない。むしろ御代（みよ）がわりやオリンピックなどという狂騒曲によって、戦後の〈危機〉を、「きれいごと」によって、見ようとしない方向に行っているのではないのか。

本書は、平成十七（二〇〇五）年から平成二十一（二〇〇九）年にかけて、漫画家の小林よしのり氏が責任編集をする総合雑誌『わしズム』に連載したエッセイを集めたものである。同誌では各号ごとに特集テーマが設定され、筆者もそれに合わすかたちで書いたが、一貫しているのは、平成という時代の内包する危機の諸問題を、主に文学作品を軸に論ずることであった。

昭和四十五（一九七〇）年十一月二十五日に、作家の三島由紀夫は市ヶ谷の陸上自衛隊東部方面総監室に、彼の主宰する「楯の会」の青年五人と共に入り、当時の益田兼利（ますだかねとし）総監を人質にし、バルコニーから自衛隊員に演説の後、割腹自決をした。三島の主張は、占領下につくられた日本国憲法（九条）改正のため立ち上がれというものだったが、それは戦後の日本人が高度成長による虚妄の平和のなかで、自分の存在そのものに嘘をつき続けることへの苛烈なる批判であった。自衛隊員に自らを否定する憲法をなぜ護ろうとするのか、と問いかけた三島は、政治問題でもなく、憲法の条文のことでもなく、何よりも〈言葉〉が真実を裏切ること、そのことを先鋭化したのであった。それは戦後二十五年、四半世紀目に起こった真の意味で文学的な事件であった。筆者は当時中学一年であり、三島のことも文学のことも何も知らなかったが、この「事件」をきっかけに文学にのめり込んでいく

ことになった。

自決の年の七月に、三島は「私の中の二十五年」という文章を新聞に発表し、その最後を次のように結んだ。

私はこれからの日本に大して希望をつなぐことができない。このまま行ったら「日本」はなくなってしまうのではないかという感を日ましに深くする。日本はなくなって、その代わりに、無機的な、からっぽな、ニュートラルな、中間色の、富裕な、抜目がない、或る経済的大国が極東の一角に残るのであろう。それでもいいと思っている人たちと、私は口をきく気にもなれなくなっているのである。

三島の自裁から来年の令和二（二〇二〇）年で五十年、半世紀の時が経つ。平成の三十年間とは、「或る経済的大国」をふくめた「日本」が「なくなって」いく時間であったといっても過言ではない。この平成という時代の崩壊し腐食してゆく「日本」を文学の言葉によってとらえてみたい、それが本書の試みに他ならない。政治学でも経済学でも社会学でもなく、文学が放つ言葉の力だけを信じたいとの思いもあった。もちろん、取りあげ

た文学作品は、「平成」期のものはほとんどなく、明治以降の作家、とりわけ昭和の文学、戦後文学であったことは、自明の理であろう。「平成椿説文学論」なるタイトルの由来も、またこの時代のイロニーの結果と申し述べておきたい。

第一論　文学における「戦争」と「平和」

吉田満『戦艦大和ノ最期』、大岡昇平『野火』

『戦艦大和ノ最期』の今日へのメッセージ

大東亜（太平洋）戦争の終結から七十四年、戦争を体験した日本人の数も少なくなった。日本の戦後の文学で、あの戦争を描き、死んでいった同胞への鎮魂として描かれた一篇の特筆すべき作品がある。

吉田満の『戦艦大和ノ最期』である。

昭和二十（一九四五）年三月二十九日、世界最大の不沈戦艦といわれた「大和」は、沖縄への特攻作戦に参加して、日本海軍最後の艦隊出撃をした。吉田満は、学徒出身の海軍少尉として、この「大和」に乗りこみ、哨戒（しょうかい）当直（敵を監視する）として、その戦いの一部始終を大局的に捕捉し、そして九死に一生を得て帰還したのである。すごいと思うのは、吉田満が、終戦の直後に、この自らの体験した「大和」の最期を記した草稿を、雄渾（ゆうこん）な文語体の文章でほとんど一日で書きあげたということだ。

「大和」の出撃の場面はこうである。

一五〇〇「大和」出港、艦静カニ前進ヲ始ム出港ハ港内ニ本艦一艦ノミ　秘カニシテ悠容タル出陣

碇泊ノ中ノ僚艦ヨリ　千万ノ眼、無言ノ歓呼ヲコメテ我ラニ注グ　ワレコソ彼ラガ輿望ヲ担ウモノ　一兵マデモ誇ラカニ胸張ッテ甲板ニ整列ス　想エバ、巨艦往ッテ再ビ還ラザル最後ノ出港ナリキ

「大和」の司令長官は伊藤整一中将。第二水雷戦隊所属の九隻、巡洋艦「矢矧」、駆逐艦「冬月」「涼月」「雪風」「磯風」「浜風」「初霜」「朝霜」「霞」。これらの精鋭が、「大和」を中心に輪型の陣を布いて出港したのであるが、港内を出てゆくときの「大和」はただ「一艦ノミ　秘カニシテ悠容タル出陣」であった。

大東亜戦争の緒戦において、日本海軍がパールハーバー攻撃に見られるように、航空機によって多大な成果をあげたにもかかわらず、最終的には〝大艦巨砲〟の旧式の考え方から脱皮しえず、アメリカ軍の航空機攻撃のまえに、「大和」という巨艦をたださらすことになったのは、たしかに歴史の皮肉であろう。また、明治維新以来、西洋の文明を受け入れることにやっきとなり、「文明開化」をおしすすめて近代文明と技術の結晶としてつく

りあげた「大和」の最期が、特攻という、必敗を覚悟して滅びるという古い日本的な精神主義に殉じる他はなかったことも、歴史の運命のように思える。

しかし、いずれにせよ、「大和」という巨大戦艦には、日本人にとって未曾有（みぞう）の、あの戦争のひとつの真実が表象されていることに間違いはない。吉田満は、この「大和」と運命を共にすることになったのであり、生き残ることで、その真実を後世に書き遺（のこ）すことになったのだ。もしこの作品が書かれなかったら、戦後の日本人は、戦勝国アメリカの情報によってしか、「大和」の最期を知りえなかったかも知れない。

しかし、この作品が世に出るのは容易なことではなかった。そのことは言及しておく必要があるだろう。

そもそも『戦艦大和ノ最期』は、文芸批評家の小林秀雄の編集による『創元』昭和二十一（一九四六）年十一月創刊号に掲載されるはずであった。小林秀雄は亡き友人の中原中也の詩と、自らの評論「モオツアルト」とともに、無名の吉田のこの作品を掲載しようとしていたのである。小林秀雄は、『戦艦大和ノ最期』が日本人にとっていかに大切な、決定的な作品であるかを、その慧眼（けいがん）によってとらえていたのだろう。

しかし、これはＧＨＱによって何と全文削除の指令を受けたのである。日本を占領した

連合国総司令部は、米軍の「民間検閲支隊」（ＣＣＤ）を中心に、当時徹底した検閲をおこない、新聞・雑誌・出版はもとより、それは個人の私信にまで及んだ。「大和」の最期をまさにレクイエム（鎮魂）として描きあげたこの作品は、戦争を肯定する文学であると見なされたのである。したがって、『戦艦大和ノ最期』が完全なかたちで刊行されるにいたるのは、占領が終結した後の、昭和二十七年の八月まで待たなければならなかった。

その初版のあとがきで、吉田満はこう記している。

私は戦場に参ずることを強いられたものである。しかも戦争は、学生であった私の生活の全面を破壊し、終戦の廃墟の中に私を取り残していった。――しかし、今私は立ち直らなければならない。新しく生きはじめなければならない。単なる愚痴も悔恨も無用である。――その第一歩として、自分の偽らぬ姿をみつめてみよう。如何に戦ってきたかの跡を、自分自身に照らして見よう――こうした気持で、筆の走るままに書き上げたのである。

もちろん、『戦艦大和ノ最期』は、たんに作者自身の個人的な動機にもとづいて書かれ

【資　料】＊はエピソード

吉田 満

よしだ・みつる。1923 ～ 1979 年。大正 12（1923）年東京生まれ。昭和 17（1942）年東京大学入学、翌年学徒出陣で海軍予備学生、昭和 19 年に予備少尉、戦艦大和に副電測士として乗艦。昭和 20 年天一号作戦（坊ノ岬沖海戦）に参加し生還し、高知の人間魚雷回天の基地に。敗戦後、『戦艦大和ノ最期』執筆。カトリック世田谷教会で洗礼を受ける。のちにプロテスタントの信仰を得る。日本銀行に入りニューヨーク駐在員、青森支店長、仙台支店長、国庫局長、監事を歴任。昭和 54（1979）年肝不全で死去。

【主な著作】

『戦艦大和ノ最期』＊ 1946 ～ 1974 年。当時、GHQ の検閲で全文削除され、口語体にしたものを細川宗吉の筆名で発表し、昭和 49（1974）年まで改稿を重ねた。

『散華の世代』

『鎮魂戦艦大和』

『提督伊藤整一の生涯』

『平和への巡礼』

『戦中派の死生観』遺稿集

『特攻体験と戦後』島尾敏雄と共著

『ドキュメント戦艦大和』原勝洋と共著

『吉田満著作集』上・下、文藝春秋社

【作品解説】

『戦艦大和ノ最期』

吉田満が体験した天一号作戦（坊ノ岬沖海戦）の戦艦大和の出撃から沈没までを描いた戦記文学。

【映像作品】

『戦艦大和』監督：阿部豊、1953 年

『終戦 45 周年記念 3 時間ドラマスペシャル戦艦大和』テレビドラマ。監督：市川昆、出演：中井貴一、1990 年

大岡昇平

おおおか・しょうへい。1909 ～ 1988 年。明治 42（1909）年東京生まれ。大正 8（1919）年『赤い鳥』に童謡を投稿・入選。大正 10 年青山学院中学部でキリスト教の感化を受ける。大正 15 年成城高等学校入学。昭和 2（1927）年アテネ・フランセでフランス語を学ぶ。昭和 3 年小林秀雄からフランス語個人教授。＊小林を通じて中原中也と知り合う。昭和 4 年京都大学文学部入学。卒業後、国民新聞社、帝国酸素、川崎重工業を経て、昭和 19 年教育召集で東部第二部隊に入営。昭和 20 年米軍捕虜になり、フィリピンレイテ島の俘虜病院に収容され、敗戦後帰国。昭和 24 年『俘虜記』横光利一賞。昭和 27 年『野火』読売文学賞。昭和 53 年『事件』日本推理作家協会賞。昭和 63 年脳梗塞で死去。翌年『小説家夏目漱石』読売文学賞。＊『武蔵野夫人』は『ボヴァリー夫人』にならう姦通小説でベストセラー。＊文壇有数の論争家の「ケンカ大岡」として江藤淳『漱石とアーサー王伝説』を厳しく批判。＊昭和 47 年日本芸術院会員に選ばれたが「捕虜になった過去がある」と辞退。

【主な著作】

『俘虜記』

『武蔵野夫人』

『野火』

『花影』

『レイテ戦記』

『事件』

『成城だより』

『小説家 夏目漱石』

『大岡昇平全集』全 16 巻、中央公論社

『大岡昇平集』全 18 巻、岩波書店

『決定版 大岡昇平全集』全 23 巻・別巻 1、筑摩書房

【作品解説】

『野火』

太平洋戦争末期、敗北が決定的になったフ

富岡幸一郎（とみおか・こういちろう）

関東学院大学国際文化学部比較文化学科教授、鎌倉文学館館長。1957年生まれ。中央大学文学部仏文科卒業。第22回群像新人文学賞評論部門優秀作受賞。著書『戦後文学のアルケオロジー』（福武書店 1986年）『内村鑑三 偉大なる罪人の生涯』（シリーズ民間日本学者15：リブロポート 1988年／中公文庫 2014年）『批評の現在』（構想社 1991年）『仮面の神学 三島由紀夫論』（構想社 1995年）『使徒的人間 カール・バルト』（講談社 1999年／講談社文芸文庫 2012年）『打ちのめされるようなすごい小説』（飛鳥新社 2003年）『非戦論』（NTT出版 2004年）『文芸評論集』（アーツ・アンド・クラフツ 2005年）『スピリチュアルの冒険』（講談社現代新書 2007年）『千年残る日本語へ』（NTT出版 2012年）『最後の思想 三島由紀夫と吉本隆明』（アーツアンドクラフツ 2012年）『北の思想一神教と日本人』（書籍工房早山 2014年）『川端康成　魔界の文学』（岩波書店〈岩波現代全書〉2014年）『虚妄の「戦後」』（論創社 2017年）『生命と直感 よみがえる今西錦司』（アーツアンドクラフツ 2019年）他、共編著・監修多数。

平成椿説文学論

2019年10月20日　初版第1刷印刷
2019年10月30日　初版第1刷発行

著　者　富岡幸一郎
発行人　森下紀夫
発行所　論 創 社
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-23　北井ビル2F
TEL：03-3264-5254　FAX：03-3264-5232　振替口座 00160-1-155266
装幀／奥定泰之
印刷・製本／中央精版印刷
組版／フレックスアート
ISBN978-4-8460-1848-1
© Koichiro Tomioka 2019, printed in Japan
落丁・乱丁本はお取り替えいたします。